

全世界の百万長者よ団結せよ 風向きが変ったぞ
1968年に自由であること それは参加することだ
走れ! 同志よ 老人が君の後ろにいる
自由は与えられるのではない それは奪取されるのだ
すべての思想の帰着それは舗石だ
革命は存在することをやめて 実存するべきである
自由の敵に自由を許すな

壁は語る

学生はこう考える
J・ブザンソン 編 広田

上野文庫

19
2-6
Kab

定価 500円

成 店

壁は語る

Les Murs ont la Parole

学生はこう考える

J・ブザンソン 編 広田昌義 訳 栗津潔 構成 竹内書店

京都大学図書



8750705060

経済学部

ボス教授はあなたの内部にもいる

ブルジョワジーはすべての人間を墮落させるのが唯一の快楽である

通りの舗石をはくことは都市計画破壊の手初めである

すべては神秘に始まり政治に終る

尊敬は消え失せる それを探しに行き給うな

何ものも求めない 何ものも要求しない 奪取するのだ 占拠するのだ

必要なことは 組織的に偶然を探求すること

行為が意識を設立する

あなたが世界に小便をひっかけつつけるならば 世界は力強く返答するだろう

想像力が権力を奪う

俺たちは確認した 2 + 2 はもはや 4 ではない

倦怠が汗をかいている

J・ブザンソン 編／広田昌義 訳／栗津潔 構成

壁は語る Les Murs ont la Parole

学生はこう考える

竹内書店

京 都 大 学

1649 168

図 書

19-2-6. Kap

このたびもまた、それはさくらんぼの災る頃のことだった。

パリ・コミューンから100年目になろうとしていた。建物の外壁は洗いつづけられていた。何かを待ちうけている壁たちは年齢が分からないような画一した白衣を身にまとっていた。ただ一個所、といってもよいであろうソルボンヌだけが依然として黒い壁だった。通りは、この時の通りは車の混雑を意味しているだけだった。“貼紙禁止”もまだひとつの詩になってはいなかった。前世紀の法律だった。

一人が、ペンキの爆弾で爆散を行ない、“禁止することを禁止する”という句を赤ペンキでまき散らした。それは塗料で城塞を攻撃することであり、そして、壁を色どることで、壁を打ち倒そうとすることだった。

“ここは掃除する”という句が立看板を取り除き、壁新聞は、北京の表象文字はもたなかったが、フランスをその最も昔のバリエード以来動かしているブルードンからバクーニンにいたる、シュールレアリストから構造主義にいたるまでの思想をもって、五月のさくらんぼのように密生した。ビュヴィ・ド・ジャヴァンヌのフレスコ（ソルボンヌの大講堂にある）の下に、大教室の廊下に、理学部の塔に、サン・ルイ島のルイ15世時代の館に。



壁文はそれ自身が自由となった。そして、誠実な連中が何と多く“ぼくは何も書くことがない”と書き記したことか。彼らは幼稚だったのではない。彼らは“共にある”とを感じるために叫んだのだ。

無名で参加するものの記念。句を書きつけた連中は署名をしなかった。筆者は状況の一部となったのだ。

しかし、これらの叫び、白亜には釘で刻まれ、壁石には石灰で、紙にはインクで書かれたこれらの叫びは、政治を否定しながら、哲学、美学、詩に異議を申し立てながら、創造したのだった。言葉のフォーラム、ひっかき文字のデモクラシー。付加したり、答えたりした言葉が対話を形成していった。

6月の壁洗いがもう5月の赤や黒の諷刺の言葉を紛砕している。壁は塗り変えられる。

おそらくはじめてのことだろう、或る歴史的記念物が歴史的であろうとはしなかったのだ。

抗議の文句や議論の言葉、或る春の季節のたまゆらの記念は消え去ってしまうだろう……

素晴らしい耳をもったこれらの壁たちは、言葉を持つ権利を要求したのだが、もう両眼をも失ってしまうのだろうか？ 何故なのか？

この本はそこで生まれた。

ジュリアン・ブザンソン

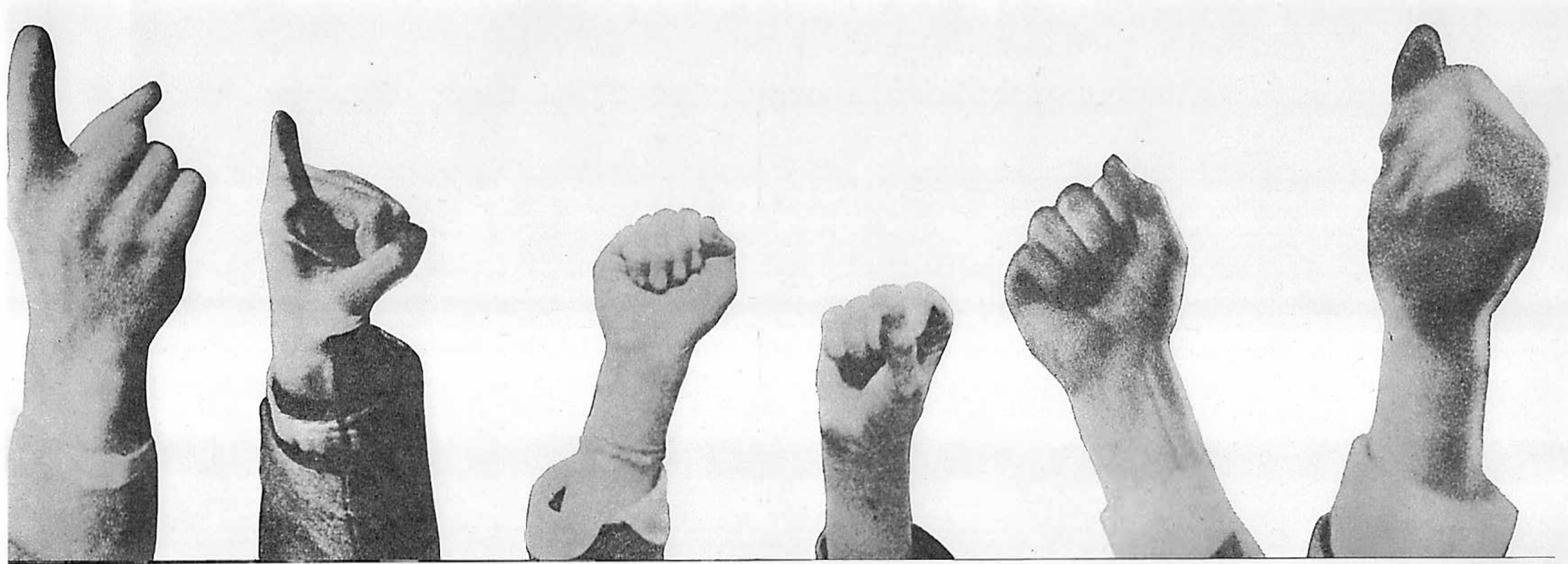
想像力が権力を奪う

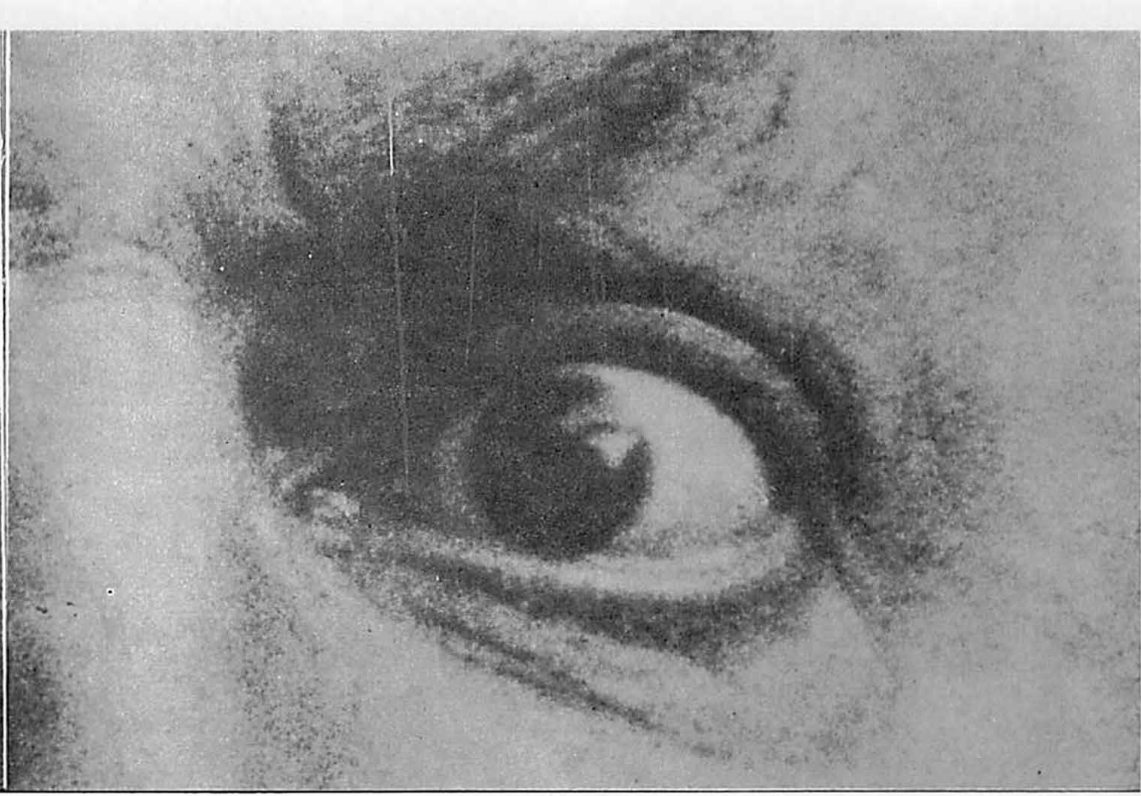
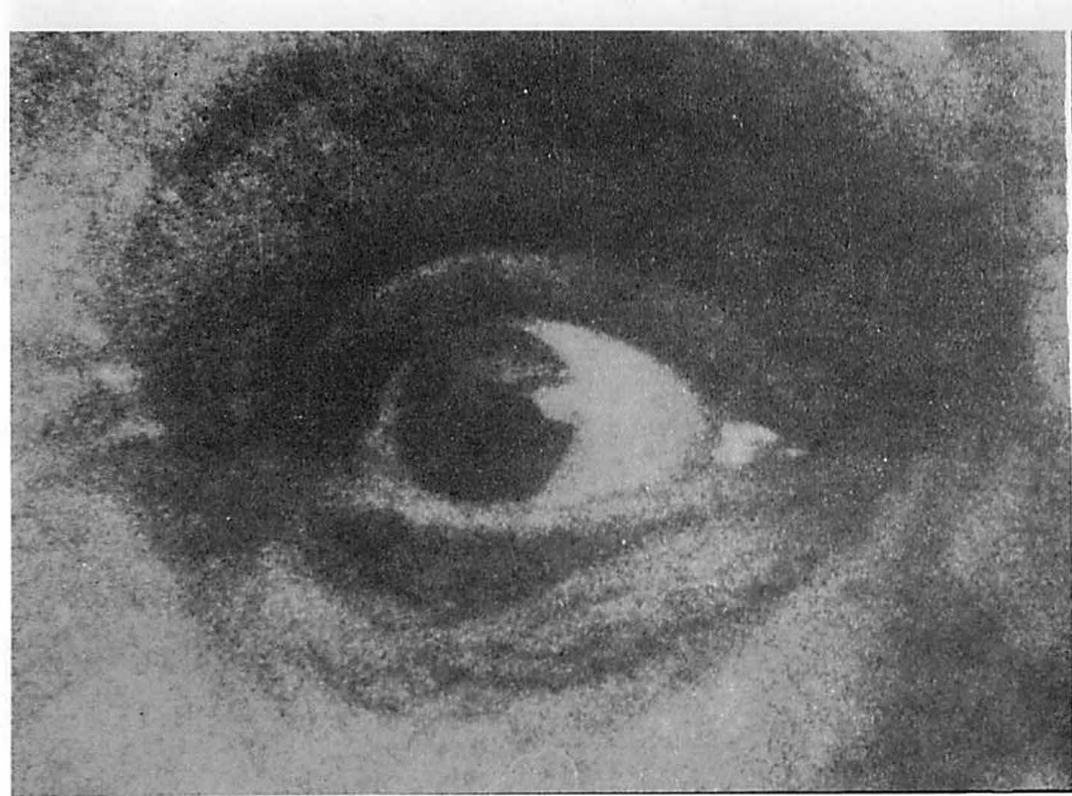


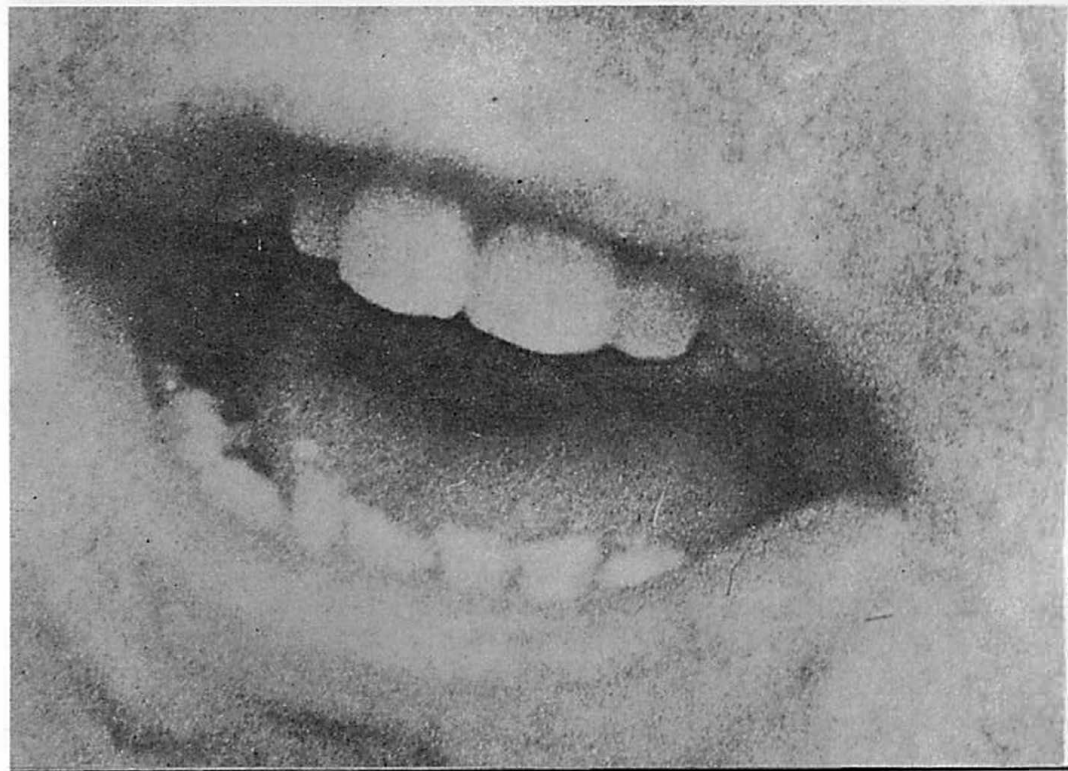








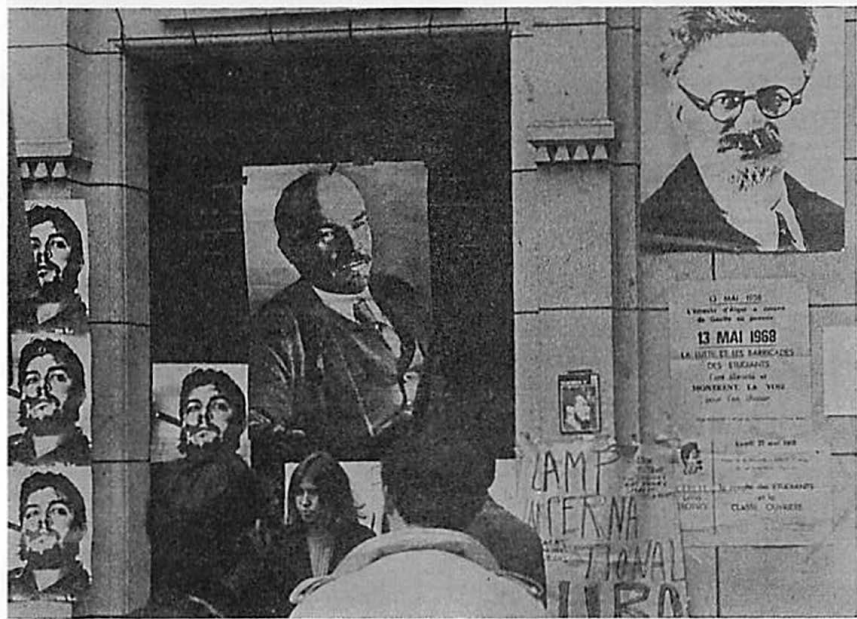




教会はもう沢山だ

余は永続的幸福状態を布告する





自分自身の栄光の中に無限にひたり切っている壁。

学生になるのは簡単だ。それにとどまるのには？ ストライキだ。

異議申し立て。しかし、まずオマンコが先だ。

夢想は現実である。

全世界の百万長者よ団結せよ。風向きが変わったぞ。

「クソ」などとも言うな！「クソ」を他の奴らに噴かせろ！

清純に参加しよう。掃除の小母さんがいないのだ。

君を愛すぞ おお、その言葉、館石でもって伝えましょう!!!!

自由とはわれわれが有していた財産ではない。それは、法律、規則、偏見、無知、etc によってわれわれが所有することを妨げられていた財産なのだ。

政治屋どもとその跽だらけのデマゴギーの餌食になるな。われわれ自身だけを頼りにせよ。自由なき社会主義とは兵舎である。(バーニソン) ——アナーキスト革命家組織

私は叫ぶ。
私は書く。
——無名を強制された者。五九五三七八八二二三三四号乙

シャルロ、^{「チャップリンが初期の映画で扮した人物シャルロにひっかけて、シャルル・ド・ゴールを指す。」}
俺たちはもはや子牛たちではない。
俺たちはもはや將軍の前の信徒どもではない。

教会はもう沢山だ。

ソルボンヌ、デゼコール通り=通りの学校。そこでソルボンヌを燃やしてしまえば？

指が月を示している時に、樹が君が見るのは指の先だ。(中国俚諺)

ほくたちが欲するのは、荒々しく、はかないひとつの音楽。

ほくたちは、根本的革新を提案する。
コンサートの一ストライキ。
音楽集会。集団的研究講座。
著作権撤廃。音楽構造は、各自に属しているのだ。

精神病院の、
監獄の、
そして学部、
門を開こう。

注意・出世主義者と野心家たちが、「社会主義者」の仮面をつけて扮装する可能性あり。

自主管理を望むのか？ 自主所有からはじめ給え。

バリケードは通りを閉鎖するが、道を拓く。

ほくは何か言いたいことがあるのだが、それが何だか分からない。

人間は、馬鹿か利口かではない。自由か自由でないかである。

階級なき社会の民主的高校のために。
民主的社会的投票なき高校のために。

もはや、二種類の人間たちしかいなくなるだろう。子牛たちと革命派だ。これが結婚すれば、革モ一派となるだろう。

プチ・ブルのフランスよ、お前の甘い
静けさが再び戻るなどと思うな、カッ
コが再びとじられるなどと思うな、政
体は執行猶予になっているだけだ。

俺は楽しんでいる。

新しき性的倒錯を創り出せ。
(これ以上俺には無理だよ)

大敵：しばしば支配者が犯した不正を
赦免する行為。

論理とは、表現方法なり。

疎外が終ったところで、あなた方の疎
外がはじまる。

同志諸君、政治学院でも受はできる。
野原でやるばかりが能ではない。
——3月22日運動

異常事態にあつては、
異常手段を。
しかし犠牲は適度に。

いい加減主義は打倒せよ。
朝生暮死万才。
——悲観主義的マルクス主義青年同盟

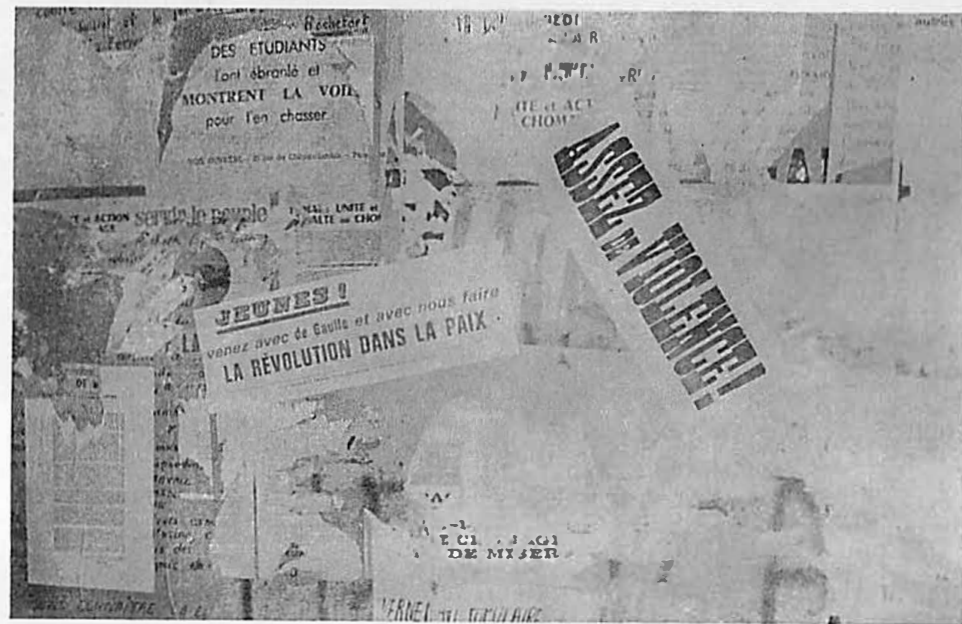
禁止することは禁止する。自由はひと
つの禁止からはじまる。他人の自由を
犯すことの禁止である。

芸術は死んだ。そこではゴダールは何
もできないだろう。

倦怠が汗をかいている。

非革命的週末は、常時革命的な1ヵ月
間よりも無限に血なまぐさい。

フィガロを燃やせ！ いや、エコール・
ノルマルだ〔エリート養成
のための学校〕。



想像力が権力を奪う

想像力の欠如 それは欠如を想像しないことである

現実を欲すること 欲することを現実化すること もっと結構!

CONTRE LA VIOLENCE POLICIERE
LA VIOLENCE Dans la rue



GOS
ERRE B
THE KAST
RÔLE
EJEU
LA MORT
BALLET
BULLDOGT

VIVRE sans
Jouer sans
entraves

DANGER

Erstmont
L.S.P.

ice Pa...
Netting...

STRIVAL
REBASEMENT

700 N. PARKWAY
SPHONTE
5-31-43
CLUB
FRANCE

"THE OUTLAW"
de **HOWARD HUGHES**
UNE PÉRIODE D'AMÉRICANISME DE LA PLUS SPECTACULAIRE DES LÉGENDES
PREMIER ET COMMERCE PAR **HOWARD HAWKS**
ÉCRIT PAR JULES FURTHMAN ("BO BOBO" . "LE GRAND CONSEIL")
WALTER HUSTON . DOC HALLAMBY . JACK BUETER . BILLY THE KID
THOMAS MITCHELL . PAT GARRATT . JANE RUSSELL . BOO

VERSION ORIGINALE 1/2 TITRE **INTEGRALE**

UNE BLONDE Q

Tous les soirs à MINUIT au STUDIO de la HARPE
8, rue Saint-Jacques / rue de la Harpe

ÉROTIQUEMENT...votre...

19 de LUIS BUÑUEL et SALVADOR DALÍ

UN CHIEN ANDALOU

de Duncan MAKAVEJEV avec
EVA RAS

UNE AFFAIRE

[illegible]

後奴(ド・ゴール)は、3週間かけて、
5分間の演説〔5月30日の5分間の〕をし、
10年間でもできなかったことを1ヵ月
でやるといった。

革命とは、真であるが故に、倍じ難い。
もうエレベーターに^{エレベーター}乗るな。権力を取
れ。

選挙戦
子牛たち
信徒ども
投票

もし、俺が、何も変わるべきでないと
考えるならば、俺はひとりの間抜けだ。
もし俺が考えようとしないなら、俺は
ひとりの卑怯者だ。

もし俺が、何も変わらないことが得にな
ると考えれば、俺はひとりの卑劣漢だ。
もし俺が、間抜けであり、卑劣漢であ
り、卑怯であるならば……俺はド・
ゴール主義者だ。

(フィガロ紙〔ブルジョワの愛読するド〕に
のみ禁転写)

ボス教授はあなたの内部にもいる。

シジフォス……

これらの壁の上の、性的抑圧と自己拒
否を見よ。

——オブスキュランティズム打倒

行動は、ひとつの反^{レフ}動ではなく、ひ
とつの創^{クレ}造であらねばならぬ。

見張り番と射撃手の観点からすべてを
考えてみた結果、クソが馬に乗ること
は私には不愉快なことではない。(ル
ネ・シャル)

催涙弾を投げる野郎の上に節石を敷い
てしまえ!

走れ! 同志よ。老人が君の後ろにい
る。

ド・ゴール派の道中には染色体がひと
つ多いのではあるまいか?

あなたが世界に小艇をひっかけつつ
るならば、世界は力強く返答するだろ
う。

小グループ派の議会主義的客観性を打
倒せよ。

知性はブルジョワの側にいる。

創造性は大衆の側にいる。

投票はやめよ。

パリでは、ラマルチヌやユゴーやユ
ージェースの後で、誰もこのことは考
えなかった。涙を流すためには、催涙
弾しかないということ。

快樂に対する留保は、留保なしに生き
る快樂をそそりたてる。

人間の解放は全面的か、全くあり得な
いかである。

労組は、淫売家だ。

ごろつき、それはわれわれだ。

おえら方に対してきびしいのは、強い
民族の特徴である。(プルターク)

お互いに相手の上にとって愛し合おう。

セックス。

それは結構だ、と毛沢東はいった、け
れどもあまりひんぱんすぎるな、と。

同志諸君! 私のことを考えてくれ給
え。(エミール・ゾラ)

想像力とは天分ではないが優れて征服
の対象である。(A・ブルトン)

ド・ゴール万才。

——マゾヒストのフランス人記す

ポリ公はわれわれ一人一人の中に眠っ
ている。それを殺さねばならぬ。

ぼくは繰り返す。三分の一など何の役
にも立たぬ。すべてを(そして残りを)
奪え。

おいらは大きくなったらポリ公になる
ぞ!

これで十日間の幸福。

ブルジョワジーはすべての人間を墮落
させるのが唯一の快樂である。



資本家は、彼の自由を守るためにコン
コルド広場にいった。ド・ゴール支持
の徒党は、諸君に、搾取される自由を
保証しようというのである。資本家が
自由であれば、工場は徒刑場だ。——
行動委員会連携

俺は楽しんでいる。

あなたが世界に小便をひっかけつづけるならば 世界は力強く返答

演説は反革命的である。

「文化」という言葉を聞くと、わが国
国家保安隊を出動させるのである。

プロレタリアとは、自らの人生の使い
方に何の力も持たず、そしてそのこと
を知っている人間である。



するだろう



権力は奪取されるのではない。かき集
められるのだ。6月18日の呼びかけ
(総選挙)の記念日に、われわれはド・
ゴールを熊手でかき集めるだろう。

歴史のしわくちゃなモグラが、ソルボ
ンズを見事に喰いつくしたようだ。
——マルクスからの電報・1968年5月
13日

通りの舗石をはくことは、都市計画破
壊の手初めである。

君たちが、知性を所有することをわれ
われは拒否しようとするものではない。
しかし、少なくとも、君たちが知性を
使用することは拒否する。

尊敬は消え失せる。それを探しに行き
給うな。

孫喰ぬり変えはやめよ。社会構造が腐
敗しているのだから。

快楽に対する留保は 留保なしに生きる快楽をそりたてる

何ものも求めない。
何ものも要求しない。
奪取するのだ。
占拠するのだ。

少し譲歩することは多くを妥協することだ。

苛酷な舗石の現実。—— 一国家保安隊

最も美しい彫刻、それは砂岩の舗石だ。
重い、批判の舗石、それはポリ公の面
に投げつける舗石だ。

革命は存在することをやめて実存する
べきである。

まず孤独、つぎに、そして、究極的に
連帯。

黄金時代とは黄金が支配していない時
代のことであった。黄金の牛はつねに
泥からできている。

君の銃を放すことなく、君の愛を抱擁
せよ。

自由は、すべての犯罪を内に含む犯罪
である。それは、われわれの絶対の武
器である。

同志諸君、警戒せよ。共和国秩序が再
建されそうだぞ。—— 一敗北主義者

教授先生、あなた方は、あなた方の文
化と同じ位に年老いている。あなた方
の近代主義は、ボリスの近代化に過
ぎない。

文化はこなごなになっている。——怒
れる者

学んだことはすべて忘れ給え。

まず夢想することからはじめ給え。

君たちの頭脳のボタンを、股袋のボタ
ンと同じ位しばしばはずしたらどうか。

80%は投票し、5%は改革に参加する。



われわれは望む。人間のための社会を。
社会のための人間ではない。われわれ
が望むのは生きる喜びであって、生き
る苦しみではない。

私服のC・R・S〔国家保安隊員〕よ、お
掃りの際には足元にくれぐれもご注意。

若い女性は赤ければつねにより美しい。

国家保安隊員諸君、ここで君たちの契
約を取り消すことができる。

彼らの悪行には方法がある。(ハムレッ
ト)

労働者の子弟は大学には6%。
感化院には90%。

死すべきもの、一時的なもの、限界あ
るもの、排他的なものが存在するのは、
体制と組織の中にしかすぎない。



僕は社会にクソを喰わした。が、相手
も僕にしこたまおかえしをしてくれる。

幸福とは、^{ソシアリズム}政治学院においては、新し
い観念である。

売りたい。

皮製上着。

^{C・R・S}アンチ国家保安隊特別デモンストレー

ション保証付。大。100フラン。

他者の自由は、私の自由を無限に増大
する。

これを言うのは悲しいことだが私は赤
旗と黒旗なしに勝利することは不可能
だと思う。しかし、それらを——後には、
破り棄てねばならない。(ジャン・
ジュネ)

自由の敵に自由を許すな。

われわれが持っているのは、前史的左翼である。

権力は工場を持っていた。労働者がそれを奪った！ 偽権力は大学を持っていた。学生たちはそれを奪った！ 偽権力はもはや権力しか持っていない…… われわれはそれを奪うだろう！

想像力の欠如、それは欠如を想像しないことである。



大苦悶。

“ド・Gは苦しんでいる。労働者は労働せず、教師は教えず、学生は学ばない、と。しかし、われわれは彼を最も苦しめているものを知っている。それについて彼は何も言わないが、それは、資本家が資本を増やさないことなのだ。”——ルノー・フラン工場。ストライキ労働者



暇な時間をソルボンスでつぶす。
暇に委せてソルボンスを占拠する。

貼紙禁止を禁止する。

ボロン・ジョキラル ジョキラル ボロン
一般意志対將軍の意志。

黒から脱け出すためには赤が必要だ。

大げさにやること、これこそが武器である。

行動のロマンチズムなどあり得ない。
抒情的な状況なぞあるはずはない。君の態度を使い給え。客観的分析が必要なのだ。事実の領域で自己を位置づけること、行動すること、美しい方程式のような論理的改革。それだけでは充分ではない。

自然は主人も召使もつくらなかった。
私は法律を与えることも受け取ることも望まない。

主人とは、神とは、何か？
両者とも父親の似姿であり、必然的に弾圧的機能を果たす。





想像力が権力を奪う。

“クローデルは、大司教のためのミュージックホールだ。”(H・D・モンテルラン)

明晰とは太陽に最も近い傷である。委員会の蔭で安眠するな。

無礼な振舞いは革命の新兵器である。

人間はルソーのいう善良な野蛮人でもなければ、教会やラ・ロシュフコーのいう悪人でもない。彼は、抑圧されれば暴れ出し、自由であればおとなしいのだ。

服従は意識からはじまり、意識は不服従からはじまる。

“主”も神もなし。神はまくだ。

文化とは生の倒錯である。

ここにかつてひとつのブルジョワ大学ありき。

誰も足を踏み入れたことのない道に、危険をおそれず踏みこめ！
誰も考えたことのない思想に、危険をおそれず頭をつっこめ！

最後の社会学者が、最後の官僚のはらわたで首をくぐられるとき、まだ“問題”が残っているだろうか？

過度の偉大さは、現実に対する感覚を失わせる。——シャルル・ド・ゴッタル

現実を欲すること、結構！
欲することを現実化すること、もっと結構！

僕は僕の欲望を現実とみなす。なぜなら僕は現実を信じているから。

文化とはジャムに似ている。少なければそれだけうすくひきのばす。

産業化がわれわれを脅かしている。ゴム製乳首は社会を食人種に変えてしまうぞ。

革命と階級闘争を、日常的現実には照らし合わせることなく語るものは、口の中に屍体を持って語るものである。

ソルボンヌの都市計画は、われわれが知っている去勢者の一世代をつくった。

しかし、誰もが息をつきたく誰もが息をつけず、多くのものが“もっと後になったら息をつこう”といっている。そして大多数は死なないのだ。なぜなら彼らは既に死んでいるから。——
一日居士

閣下、これは革命ではありません、変革であります。

通りの舗石をはぐことは都

市計画破壊の手初めである。

牡山羊（^{ブカ}）とは何か？ 門を叩き破り、ソルボンヌを万人に開放するもののことである。

ザマンスキー〔^{パリ大学経済学者}）はどのようにして、牡山羊を羊に変えてしまうのか。

君たちを去勢することによって。
君たちを冠婚することによって。

注意せよ。マスクエドモがわれわれを包囲している。異議申し立ての“劇”に止まるな。劇の異議申し立てに移ろう。

愛をすればするほど革命をしたくなり、
革命をすればするほど愛をしたくなる。
——怒れる者の一人

明日は楽しめるという展望は、ほくの今日の苦勞を決して慰めてくれるものではない。

働くものたちは、働かないと倦怠する。
働かないものは、決して倦怠しない。

どんな種類の人間をも活動家にしよう
という学生の傾向は、彼の不能を雄介
に物語っている。——怒れる女子たち

自由とは必然性の洞察である。

倦怠していることに気付けば、人はも
う倦怠することをやめる。

喫煙可。特に阿片を。(組合に入ってい
ない消費者の責任において)
火事の危険あり。政府はタバコから60
%の間接税を取っている!

君たちの言葉からキュロット(パンティ)
を取ってしまえ、サンキュロット(セ
キヨロツト)の域に達するために。

不良少女、不良少年万才。

必要なことは、組織的に 偶然を探求すること

冒険を打ち立てた怒れるものたち万才。

——ほくたちは拒否する。/……召集
され……/……公園住宅化され……/
コレハザラカラロイ
卒業資格化され……/登録され……/
コレハザラカラロイ
教育され/警備で設られ…/
コレハザラカラロイ
遠隔操作され/能率ガ
グアイオレフトガ大好き
ス化され……/習慣化され
……/ることを。

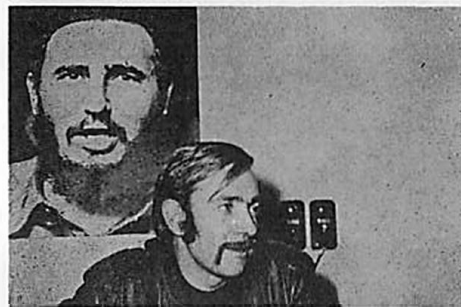
ここでは、みんなが自発する。

鋪石をはぐと、その下は砂浜だ……
[パリの鋪石の下には砂が敷いてある]

政治は通りで行なわれる。

俺を解放してくれるな。俺のことは俺
がやる。

無が全体になることも可能である。必
要なことは、それを見ること、そして、
時にはそれに満足することである。







1968年に自由であること それは参加することだ

俺たちは確認した。2 + 2はもはや4
ではない。

われわれはすべて“好ましからざるもの”だ。

われわれの一人一人が国家なり。

怪よはねとべ、大衆の革命的エネルギーを放出するために、

偶然性は、スト破りではないだろう。

すべての思想の帰着、それは鰐石だ。

行為は直覚的であり、その中に、他者の
実現化を含んでいる。

言葉の場か、或いは疎外されたお喋りの
場か？



議会がブルジョワの劇場になる時、すべてのブルジョワ的劇場は議会になるべきである。

労働者よ、君は25歳だが、君の労組は前世紀の遺物だ。それを変革するためにわれわれに会いに来給え。

私は人々を扇動し、不安にしたいのだ。私が売るのはパンではなく酵母である。(ウナムノ)

批判の武器は、武器の批判を通して得られる。

もうクローデルは沢山。

触れてはいけないもの、これこそが敵である。

軽貨金。
重戦車。

至急。救急車用ガソリン。

意識あるところにのみ革命は起こる。

詩は街中にあり。

オデオン座がわれわれを占拠している、われわれはオデオン座を占拠していない！

登録され／書類化され／抑圧され／訊問され／説教され／調査され／捕えられ／ることをもう受け入れるな。

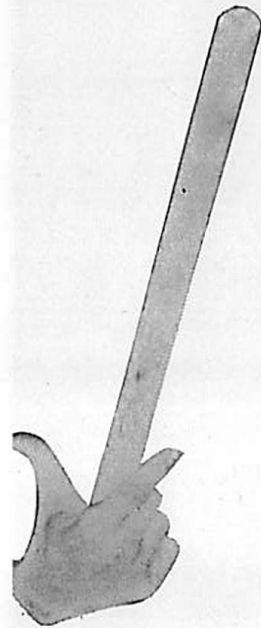
神よ、私の推測では貴方は左翼知識人である。

共に考えることに反対。共に強行することに賛成。

壁に耳あり。君らの耳の中に壁あり。

アナキー。それは、私だ。





自由とは沈黙する権利なり。

まだキリスト教徒がいたってことを御
存知かね？

火は実現する。

われわれの希望は希望なき者たちから
のみやってくる。

オーバーにやること、それが創意のは
じまりだ。

簡潔であれ。そして残酷な人喰人種で
あれ！

侵略者とは反抗する人間ではなく、肯
定する人間である。

警棒を振う輩との対話は拒否しよう。



全世界の平和主義者よ、あらゆる戦争
のたくらみを、世界市民となって、挫
折させよ。

すべての改良主義の特徴は、戦略の夢
想主義と戦術の日見主義だ。

雨
雨と風と殺戮はほくらを離散させず、
ほくらを強固に結ぶ。
——文化大活動委員会

革命には二種類の人間がいる。革命を
する者と、革命を利用する者と。（ナ
ポレオン）

恐れている人々は、もしわれわれが強
ければ、われわれの許に来るだろう。

保守主義は、腐敗と汚辱の同義語であ
る。

余は永続的幸福状態を布告する。



すべての教える者は教えられる者であり、すべての教えられる者は教える者である。

革命は、事物の中に実現される前に、まず、人間の中に実現されねばならぬ。

反動派とは、改革を正当化し受け入れて、そこに破壊行為が花開くことを認めないもののことだ。

ソルボンヌから解放されろ。(ソルボンヌを燃やすことによって)

生の反映とは、生きられたものの透明さ以外のものではない。

警告

無気力状態が政治学院を狙っている。われわれが引き受けた責任は果たそう。“沈滞している”委員会に参加しよう。講演会を開こう。

いびきをかいている評議会の目をさませよう。

対等委員会を支持し、委員会のより多くの情宣活動を求めよう。

無関心派、非活動派は自覚せよ。行動は組織中なのだ。

もし、力を用いねばならぬ必要があるならば、あいまいな態度は取るな。

ソルボンヌは、ソルボンヌのスターリングラードになるだろう。

バリケードは、革命の飛躍的進展の最も確実な指標である。(モーリス・トレーズ。1931年6月、ルーベのバリケード)

お互いに愛し合え。さもないと、あいづちにやられてしまうぞ。

終りなき怖れよりも、怖るべき終りを。これが、苦悩する全階級の政治的選言である。(マルクス)

学生を壘太子に戴く街……。

全力で闘いを続けよ。ストライキを続行せよ。占拠せよ。—— C・N・J・M (マルクス主義青年同盟全国委員会)

君らは皆安楽な生活におしつぷされてしまうのだ。

何ものも求めない。

何ものも要求しない。

奪取するのだ。

占拠するのだ。

過激派はすべて、改革する名の犠牲に傾って生きているのだ。

必要なことは、組織的に偶然を探索すること。

独立とは、人間との対話の第一条件である。

はくの自己批判はこの事実によって硬直化してしまい、この問題はもはや提起されない。

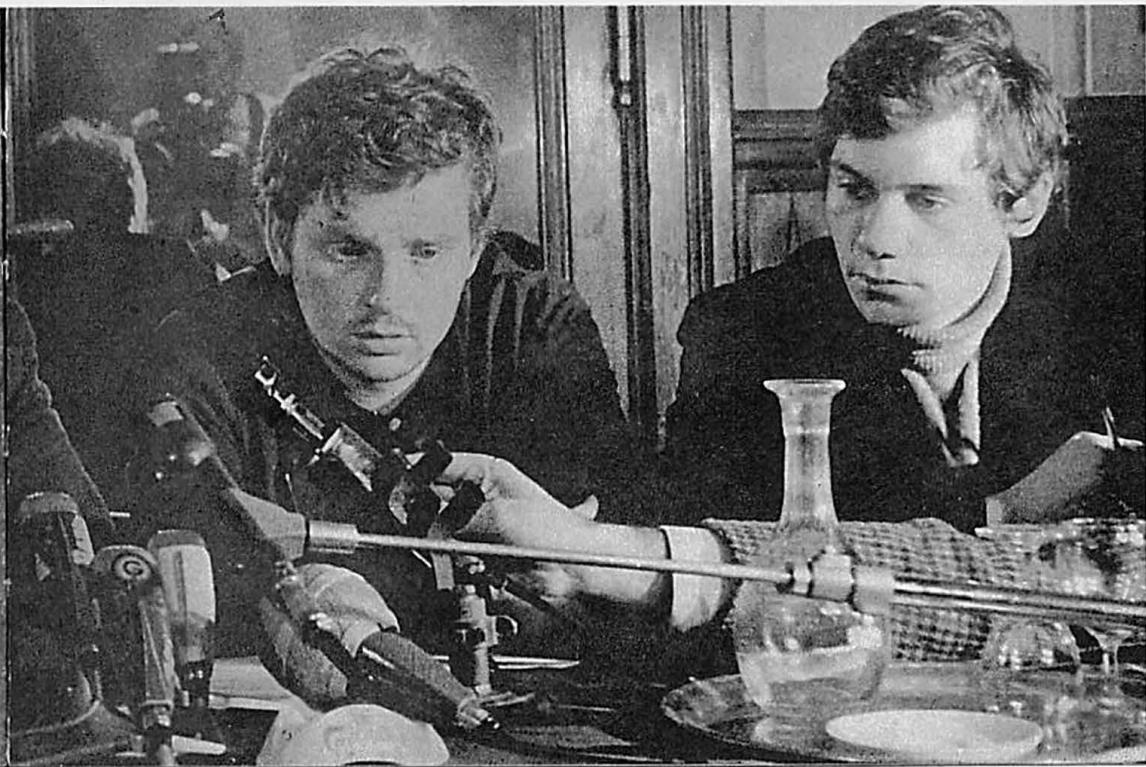
革命は、英語かぶれした奴らのための見世物ではない。

このブルジョワ的学部の施設の破壊は、革命的芸術の表現である。—— マスゲ氏

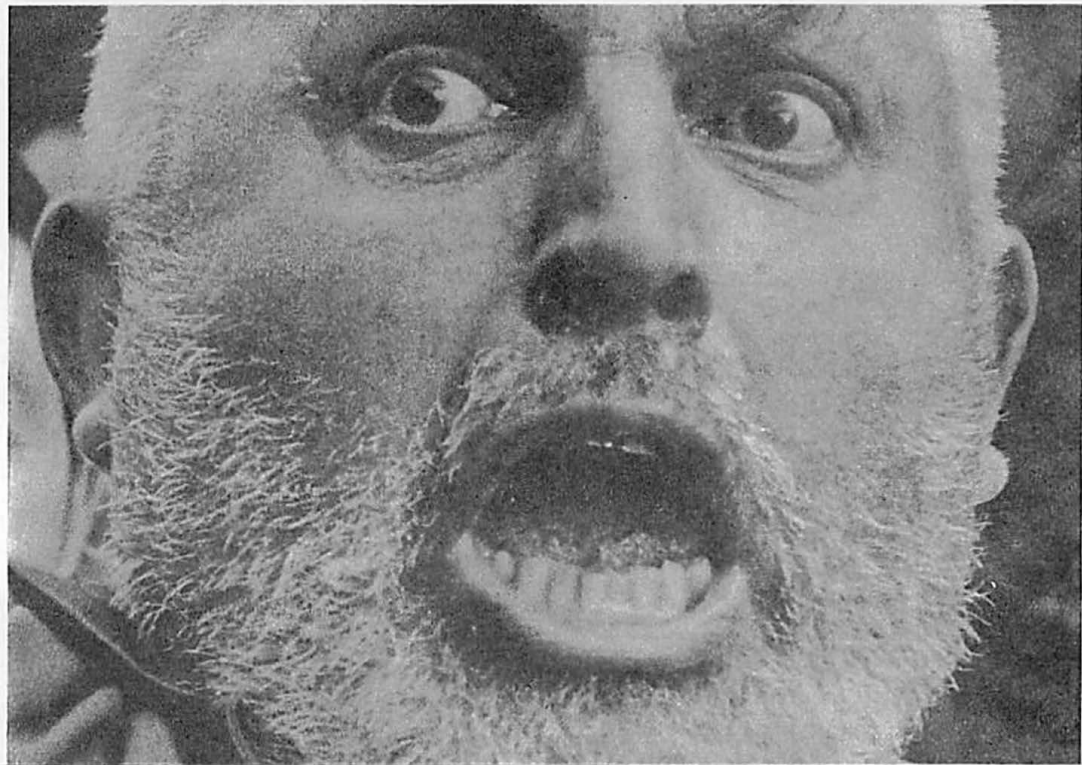
私有があるから、戦争が、暴動が、不正がある。(聖アウグスティヌス)

今、ここで、楽しみ。





自由の敵に自由を許すな



お前は、壁を洗う位のことはしたらどうだ。

君たちの革命は、混乱し形骸化した大学の模倣であってはならぬ。

官語は、次の束縛のもとに形成された個人間の、社会的関係の形態である。

1. 自然的疎外
1. 社会的疎外

したがって、官語を文法的抑圧の地点では無に帰してしまつてはならぬ、如何なる理由も存在しない。グダが、官語の消滅を宣言してから、文学は官語を再生させようとしてきただけである。

もし君が、左翼の魂をもつならば、右手でカバンをもつな。

自由は与えられるのではない。それは奪取されるのだ。(シャルル・モラス)

沈黙している思想は腐敗している思想である。

知性はブルジョワの側にある。
創造性は^{ブルジョワ}大衆の側にある。
投票はやめよ。

試験=隷属、立身出世、階級社会

われわれは、われわれの革命を起動させたにすぎない。

ロボットでなく、奴隷でもなく。

子供たちは保育所に預けて、学部の仕事に参加しよう。

われわれはすべてユダヤ系ドイツ人だ。

同志諸君、正統的革命は、わが国のすべての武装勢力を大敗し、これに人民のための行動を要請する。

^{フランス系ドイツ系}
反対のための反対。

心の底から私は大貴族と僧侶たちの墓を憎む。しかし、より以上に、彼らに身を委せた天才を憎む。(ヘルダーリン)

芸術は存在しない。
芸術は君である。(B・ペレ)

扉を鍵で閉める者は臆病者であり、したがって敵である。

ブルジョワジーはすべての人間を堕落させるのが唯一の快楽である。

ほくは何を書いてもよいかわからない。
そして何か素晴らしいことを言いたいのだがわからない。

経済は痛手を負った。潰れてしまわんことを。

君の心の窓を開け。

アルコールは身体に悪い。L・S・Dをのもう。

反動主義者はすべて強子の虎である。

塩辛くあれ、甘くあるな!

真理を隠ぺいするな。(虚偽もまた)

死ぬと叫ぶことは、生きよと叫ぶことである。

学生権力

革命、それは、主導権である。

われわれを助けよ。
君たちの子供が牢獄にいるのをもう見
たくない。



すべては神話にはじまり政治に終る。
(ベギー)

もし君たちが他人のことを考えるなら
ば、他人は君たちのことを考えてくれ
るだろう。

風立ちぬ。いざ生きめやも。

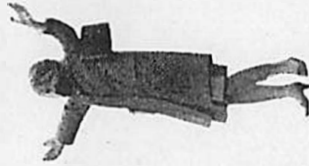
美しいか、おそらくは否。しかし何と
魅惑的だろう。生きのびることに対抗
する生は。

現実主義者であれ。不可能事を要求せ
よ。

怠惰はひとつの犯罪である。
然り、されど同時にひとつの権利なり。

怒り狂え！

自由恋愛（しかし、ここでは駄目）
何故？



ここに予定されているのは除外された
恋愛のみ。

権力は大学を持っていた。
学生はそれを奪った。
権力は工場を持っていた。
労働者はそれを奪った。
権力はO・R・T・F（国立放送局）を持
っていた。
ジャーナリストはそれを奪った。
権力が持っているものは権力だけだ。
それを奪え。

君たちのうらみつらみを総計せよ。
そして恥じよ。

革命的に考えることなど存在しない。
革命的行為しかないのだ。

行動は分裂を克服し、解決を見出す。
行動は街中にあり。

オブジェ
客体よ、消えてなくなれ！

シアンリ
馬鹿騒ぎ、それは御当人（ド・ゴール）
だ。〔5月19日、ド・ゴールは閣議で、改
革はクイ、シアンリはノンと発言〕

イデオ
思想を持て。

ここでは、すべての人は考える。

いたるところに書け！
答。“書く前にまず考えることを学べ”

運動の敵は懐疑主義である。実現され
たものはすべて、自発性に起因するグ
イナミスムからくる。

自由な報道を！

ネクタイを着けての革命はクソくらえ。

プログラム＝未来のための私有

誰のために話すのか？
言うことから、行為することへと、如
何にして移行するか。

誰が創造するのか？ 誰のために？
君たちは消費者なのか、或いは参加す
るものなのか？

直視せよ!!!

革命とは単に各委員会のものではない。
それは何よりも君たちのものだ。

偏見は文明の基礎である。（ジッド）

物を投げ棄てるな。かつてのオデオン
座はゴミ溜になったのではない。

現在そこに“生きている”社会に疑いを
入れるためには、まず自分自身に疑い
を入れることができなければならぬ。

すべてはクダである。

革命は大事に考えよう。しかし、自分
自身を大事にすることはやめよう。

現在に生きること。

ビタミンCが足りないよ。

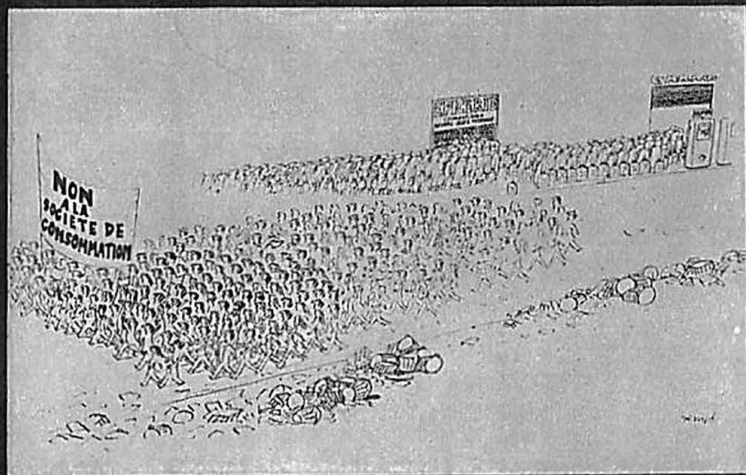




死がわれわれを襲うのが何処であろうと問題ではない。

死は喜んで迎えられるのだ。もしわれわれの戦いの声が聞き入れられ、われわれの武器をとりにもうひとつの手がさしのべられ、他の人々が立ち上って、機関銃の音の中で挽歌を響かせ、新しい戦いの叫びと勝利の叫びを響かせてくれさえすれば。——チェ！（チェ・ゲバラ）







芸術、それは費だ。

世界にひとつの舞踏する星を与えるためには、自己の中に、或る混沌を有さねばならない。(ニーチェ)

労働者評議会に全権力を。

“闘いはすべてのものの父である”(ヘラクリトス)



法律がわれわれに課した欺瞞的状况から脱れる手段は唯ひとつ。それは法律を破ることだ。(トラン)

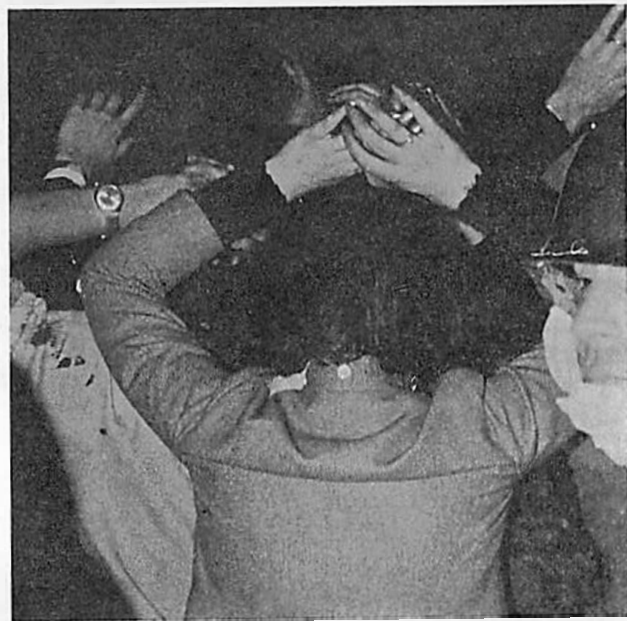
強行しよう。

この音楽の中に、現時点におけるすべての政略が含まれている。(国民公会におけるサン・ジュスト)

新しき社会はすべてのエゴイズム、



すべての利己的行為の不在の上に関て
られねばならぬ。
われわれの道程は、友愛の長征となる
であろう。



社会主義的現実主義打倒。
シュールレアリスム万才。

創造的大衆万才！
ブルジョワ的非文化打倒。
文化とは沸騰なり。

われわれは試験を受けたい。——ブル
ジョワ達

すべての革命家の義務は革命をすることである。

政治的自由。

創造性
自覚性
生

赤色恐怖は角の生えた動物にまかせておこう。

死は必然的に反革命行為である。

人生は、人がそれについてもつ意識を愛するものである。(ルネ・シャール)



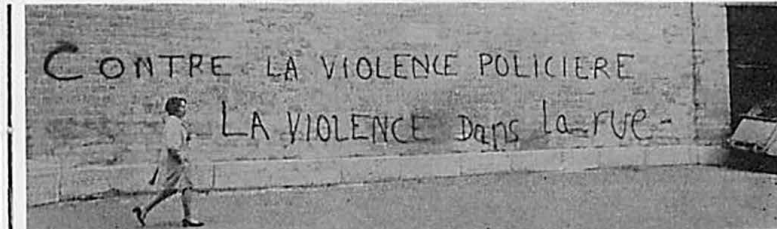
革命そして革命のみが光を創造し、そしてこの光が取り得るのは次の三つの道だけだ。詩、自由、そして愛。(アンドレ・ブルトン)

決して階級闘争を忘れるな。

正しい思想とは何処からやってくるのか？ 天から降ってくるのか？ 否。内在しているのか？ 否。それは社会的実践からのみ、即ち、階級闘争と、生産と、科学的実験のための闘いのみからくるのである。(毛沢東)

見世物的・商品的社會打倒。







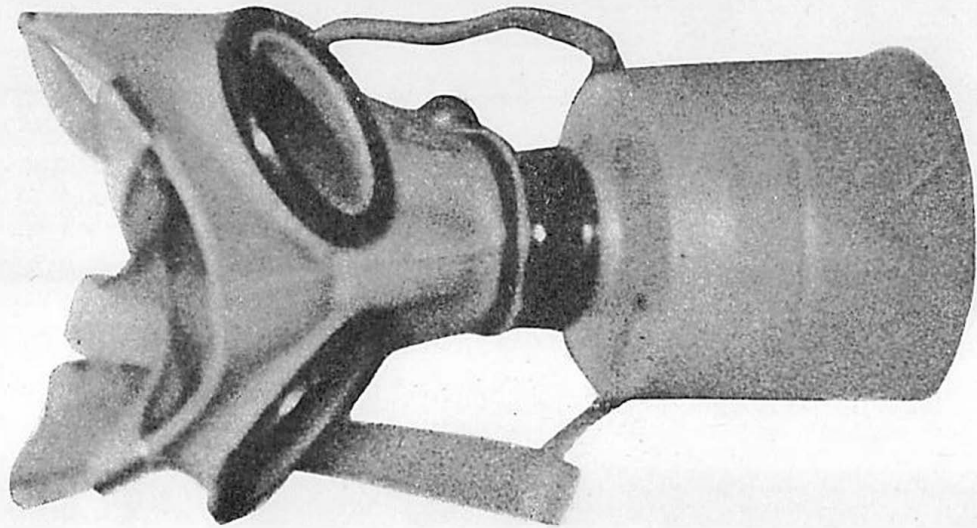
Sous les pavés la plage

舗石をはぐと
その下は
砂浜だ



君たちの「乳母」(大学を意味する)を
強姦せよ。

ジャーナリストならびに彼らを使用す
るもの打倒。



お遊びは終わった。子牛たちは力強く立
ち上がり、彼らの名称が邪正権力の濫
用とサディズムと不当行使を特徴づけ
るために用いられることに反対する。
同じく人間による子牛の搾取に反対す
る。この消費社会は子牛たちをつくり
上げることしかできないのだから。学
生の運動に強固な連帯を再び確認する。
われわれは長い以前から対話の必要性
を理解していたのである。——バリ略
農行動委員会。





ド・ゴール, ノン
ミッテラン, ノン
人民権力, ウィ

ひとつの革命をつくり上げること, そ
れはすべての内的束縛を打破すること
である。

革命よ, 余は汝を受す。

革命家は綱渡り師である。

中断することは禁止する。

全権力を労働者評議会に。(怒れる者)
全権力を怒れる者評議会に。(労働者)

君たちの隣人に語れ。

国境などは知っちゃいない。

すべての思想の帰着それは舗石だ

自由の敵に自由を許すな

走れ!

同志よ

老人が君の後ろにいる

自由は与えられるのではない、それは奪取されるのだ

君たちの言葉からキュロット(パンティ)を取ってしまえ

サンキュロット(共和過激派)の域に達するために

全世界の百万長者よ団結せよ 風向きが変わったぞ

革命は存在することをやめて 実存するべきである

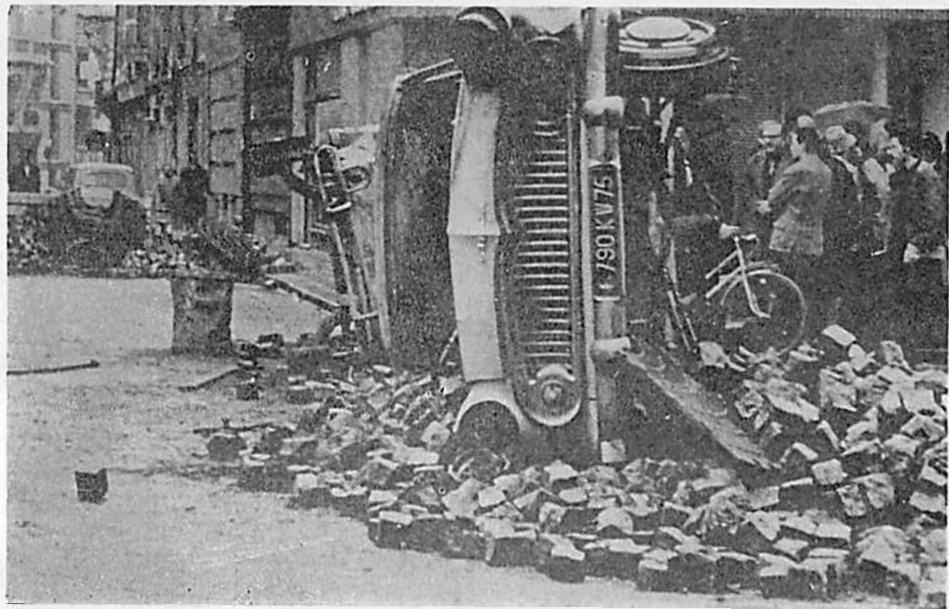
共産主義者は全貝次の真理を理解しなければならぬ。権力は鉄砲から生れる。
（鉄砲は権力から生れるのか？）

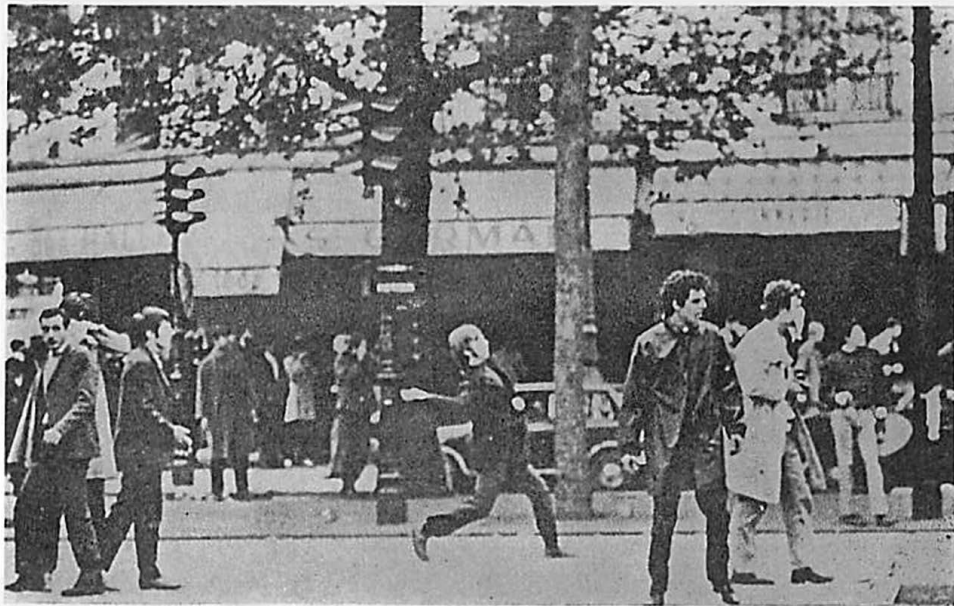
人間（人道主義、反革命的汚物打倒）は、
最後の資本家が最後のはらわたで首を
くくられるまで自由に生きることはで
きないだろう。 神もメートルもなし。

私たちの持つ潜在能力を麻痺させてし
まう愛情による固定化と闘いましょう。
——C・F・V・L（自由になりつつある
女性の委員会）

ほくは舗石の中で楽しむ。

ほくの欲望が現実だ。





自分の現実を欲望とみなすものは、自分の欲望の現実性を信じているものである。

マルクスを消費するな。

今年の夏はギリシャで過ごすな、ソルボンヌにとどまれ。



変革は、革命よりも、白く洗う。

自動車＝オモチャ

君たちもまた盗むことができる。

今日では、マゾヒズムは改革主義の形態を取っている。

棒は無関心なものを教育する。

尊敬は消え失せる



それを探しに行き給うな

行為が意識を設立する



いずれにせよ 後悔なし！

LE POUVOIR AUX TRAVAILLEURS

自由とはわれわれが有していた財産ではない それは 法律 規則 偏見

UNIS
FAC DE
IENCES

無知 etc によってわれわれが所有することを妨げられていた財産



俺たちは確認した

2 + 2 はもはや 4 ではない

人間の解放は全面的か
まったくあり得ないかである

芸術は死んだ、ぼくらの日常生活を解放しよう。

破壊の情熱はひとつの創造的歓喜である。(バクーニン)

恥ずかしさは反革命的である。

生は他の場所にあり。

ネオ・エキゾチックな東洋趣味打倒!



ほくはひとりの幸福な愚かものになりたいと夢想する。

革命の時代に生きなかったものは、生きる喜びを知らない。

学部長たちは、学部長仕事をし、ボリ公はボリ仕事をし、そして、革命家たちは革命をすることを。

『壁は語る』について

——バタイユさんは、ちょうど“5月革命”の時にパリに帰っておられて、事件を直接に目撃なさっていたんですね。この『壁は語る』に大変興味をお持ちになっていると伺って、御意見をお聞きたいと思うのですが……

バタイユ ええ、私はこの小冊子に非常な関心を持っています。一説すれば分かるように、この『壁は語る』に収められている落書きに一貫して流れているのは、シュールレアリスム的な発想です。シュールはその基本に自発性^{spontanéité}がある。この落書きの中に見られる自発性は重要である。この、無名^{アノニム}の連中が表現した自発性に、パリの、いや、フランスのすべての階層の人間たちが共感したといえると思う。その意味で、私には、この小冊子『壁は語る』は、第二次世界大戦後、パリが解放された直後の1945年～46年に、ジャック・プレヴェールの詩集『宮葉^{パルメット}』が持ったと同じ意味をフランスにおいては持ったと見える。つまり、この落書きの大部分は学生のものだろうが、そこには、一般のフランス人の心理の反映が見られるのです。

——この落書きの中に表われている学生の不満感、不快感の表現の中に、一般のフランス人は、現代社会に対する彼らの不快感の表現を認めたわけですね。

バタイユ その通りです。私が1968年4月に、一年あまりの日本滞在の後にパリに帰ってまず感じたのは、奇妙な雰囲気^{atmosphère}がフランス全体にたちこめているということでした。この点をちょっと説明しましょう。まず、私は友人の一人に、パリはまったくルイ・フィリップ時代だな、といって同感を得ました。ルイ・フ

ィリップ時代というのは、御承知の通り18世紀中葉の王政復古時代のことですが、プチブル的な、眠りこんだような時代を意味している。つまり、地方都市的な、活気のない雰囲気ですね。東京のような大都会からパリに帰るとまず感じられたのはこのことです。ところで、こういった雰囲気の中で、フランス人たちは何か苛立っている。巨大な不満を抱えこんでいる、と私には思われた。何かが起きる筈だ、起こらねばならない、皆がそう感じていたと思うんです。この苛立ち、この不満が、あの学生たちの爆発的な運動にその表現を見出した。そして、或る日、落書きが壁に現われる。パリの住民は皆何か言いたかった。しかし、眠りこんだような雰囲気の中で対話は成立しなかった。そこで、誰かが、いわばモノローグとして壁に落書きをした。しかしそれは素晴らしいことに、ディアローグのための驚くべき有効な手段となったのです。パリジャンたちは、皆、壁の落書きを見に行った。私もそうです。友人の家で昼食をしている。誰かがその日に見た落書きにこういうのがあったという。それは素晴らしい、見に行こうというわけで、昼食がすむと皆で出かけてみる。たとえば、アンジュヌ・コメディ通りにある、プロコプという18世紀から続いているレストランの前の壁に、“舗石をはぐと、その下は砂浜だ……”という落書きがあったと誰かがいう。素晴らしい、見に行こう。行ってみると、三、四人の人がもう来ている。そしてそこで、単に壁の文句とそれを読む人との間で対話が成り立つだけではなく、それを読みに来たわれわれの間で、さまざまな問題についての対話が始まり、議論が始まったのです。5月の間、壁の落書きは、新聞よりもっと多くの読者を得たかも知れないと思う。勿論、この現象は一種の現場主義というか、実際に自分の目で確かめたいという、現代人に特有な欲望の現われかも知れません。テレビなどの影響で、視覚的、映像的なものに惹かれるのが、われわれの大きな特徴ですから……

——今言われた、ルイ・フィリップ朝の雰囲気のことですが、これは、一種の後進国意識がフランス人の中に出てきたということではありませんか？ コレージュ・ド・フランスの数学の教授であるリッシュヌロ

ヴィッツ氏も、『エクスプレス』誌の対談で、社会の種々の分野、特に、管理・行政の面、教育の面で、大変革が行なわれない限り、フランスは「後進国」としてとどまるだろうという発言をしていて、常に世界の先進国民として自他共に許していたフランス人の中から、こういう発言が出てきたことを私は興味深く思ったのですが……

バタイユ　つまり、現在の世界の進歩、変化の速度が非常に速くて、フランスがそれについていけないという意識をわれわれが持ち始めたことは事実です。物質的な進歩は人間に新たな欲求を必然的に与えます。しかし、現在のフランス政府が、この新たな欲求を満足させるような政策を出してこない。それは学生の側から言えば、大学の現状に対する不満として出てくる。ソルボンヌの旧態依然とした現状は勿論のこと、新しくできたナンテール文学部も又、設備その他で満足できるものではない。特にナンテールの場合、ナンテールという郊外の町のこの大学の建物は近代的といえるかも知れないが、その周囲には、学生が散歩し、議論する場がない。つまり、学生は朝ナンテールに行くと、午後の帰る時間まで、大学の中に閉じこもっていることになる。大学というのは、一般的な都市計画の一端として計画されなければならないのに、ナンテールの場合はそうではなかった。ナンテールが5月危機の発火点となったのはじつに意味深いのです。しかし問題は、こういった学生の不満が、学生独自のものではなく、フランス人一般が持っている不満と根本的には共通のものだということなのです。だから、学生と労働者が共に闘うという状況が生まれてきたし、学生の不満の表現である壁の落書きに一般のフランス人が共感することになったのです。つまり、学生たちの壁の落書きは一般のフランス人たちにとってはカタルシスの役割を果たすことになったのです。

——“われわれは、募集され、大学卒業資格化され、公団住宅化されることを拒否する”というような落書

きもあったと思いますが、いわば管理社会の中における規格化された人間像に対する不快感の表出が多く見られると思います。これは、単に学生だけの問題ではなく、一般のフランス人に共通の問題ですね。

バタイユ 単にフランス人のみならず、人間一般の問題だと思う。

——この不満感、不快感が、5月に突然現われたアナーキー的な混乱状況の中で、一時的にはあるけれども解消されたという事実もあるのではありませんか。たとえば、“これで、10日間の幸福”という一句がありますね。10日間というのは、おそらく、5月10日に学生たちがカルチエ・ラタン一帯にバリケードを築いてから数えているので、5月20日頃書かれたものだろうと推測できるのですが、この5月20日頃というのは、共産党と左翼連合、統一社会党とが、「民主連合人民政府」をつくろうという動きがあった時でしたし、又、ゼネラルストライキも最高潮に達していて、運動全体が最も高揚した時点だと思うのです。学生たちは、ソルボンヌ、サンジエ分校、オデオン座などを占拠して、そこに泊りこんで、連日連夜、討論とデモを行っていた。つまり、学生たちにとっては、彼らの自発性と創造性を十分に発揮し得た10日間だったわけですね。この自発性と創造性が、静かな社会における大学においては実現できない。アナーキーな状況、混乱の状況の中でのみ実現できるというのは悲しむべきことだと思いますが、しかし、ともあれ彼らはこの10日間、解放感と幸福感を味わった。この感情が落書きの中に非常に多く表われていると思います。

バタイユ その解放感に、一般のフランス人の多くが参加したことは事実です。5月10日のバリケードの時にも、住民たちは窓のところやテラスに立って喜んで見物していた。フランスに特有な、あの“いっちょやっあってやろう”という心持ちですね、あれが、パリの多くの住民たちの間に拡まった。少なくとも5月

の初めにおいては、解放感がパリ全体を覆ったのです。勿論、事態の進行につれて深刻な局面が出てくることになるのですが……

——落書きの中に表われている不満感と、今言った幸福感は表裏一体を成しているわけですが、一方において、この不満感、不快感が、明確な論理的表現を取れないで、感覚的な壁の上の短い落書きとして出てきたこと、又他方においては、幸福感の実体に明確な具体的表現を与えて、現実に対して有効な、変革的な理論にできなかったことは、5月の学生の運動が持っていた大きな弱点だったと思うのです。これは、或る日本のフランス文学者も言っていることですが、有名になった“想像力が権力を奪う”という、オデオン座に書かれた一句に、じつは、5月の運動の持つ弱さが集約的に表現されているというのです。なぜなら、想像力だけでは、常に現実に対して無力なのですから……

バタイユ 同感です。学生たちの解放感、幸福感の表出として、時折一種のお祭りの気分が出てきたのも面白かった。ギリシャ・ローマの劇中人物に仮装して街中を練り歩いたり、その扮装のまま警官隊とぶつかったり……。勿論、真の意味で学生たちが望む大学生活とは、こういう幸福感の連続、お祭りの連続であるのかも知れない。しかし、それを現実化するのは難しい。その点では、想像力が権力を奪った時、その権力を奪った想像力を現実化するだけの理論を提出する力を持った思想家がいなかったことが大きな問題だと思う。これは、現在の社会の持つ問題が如何に複雑であり、如何に把握し難いかを示している。つまり、1789年の革命状況と、5月革命の状況が最も異なるのもこの点である。1789年には民衆たちは、自分たちの不満を明確に、理論的に表現する雄弁家を持っていた。ダントン、カミーユ・デムーラン、サン・ジューストなど……。しかし、現在の民衆はそれを持たない。思い出しますが、5月の或る日、ソルボンヌで行なわれた大集会に行ったことがあります。学生をはじめ、労働者、一般市民、すべての階層の人々が

集まっていた。その雰囲気は、ダヴィドが描いたフランス大革命の諸場景、たとえば、テニス・コートの誓いのような場景を私に思い起こさせた。しかし、ちがっているのは、そこで発言するのは、われわれ、公衆の前で発言するのに慣れていない人間だった。指導的な発言者というものがないのです。印象的だったのは、或る人が立って喋りはじめるが、彼はただ、“よく分からないが、何かうまくいっていない、世の中はうまくいっていない、でもそれが何だか分からない。”というだけなのです。集会の人々は先ず笑います。司会者はそれを押し止めて、発言者に、明確に説明してもらいたいという。しかし、彼は同じように、“うまくいっていない、だれども何だか分からない”と繰り返すだけです。すると、集会の人々の間から大合唱が起きた。“分かる！ 分かる！”という合唱です。落書きの中にも、“私は何か言いたい、それが何であるか分からない、しかし私は何か言いたい。”というのがありましたね。われわれが、自分たちの持つ“現代文明における不快感”を明確に表現し得ないというのは非常に重要な問題です。ですから、サルトルがソルボンヌに来て講演すると聞いた時、誰もが大きな期待を持ったのです。遂に、彼がわれわれの感情を明確に言い表わしてくれるだろう、と。しかし、サルトルもこの期待を十分に満足させたとはいえない。しかし、5月の状況にあって、とにかく発言できた人物はサルトルだけだったと思う。その意味で、コーン＝ベンディットとサルトルの対談は私には興味深かった。学生の指導者たちの中では、コーン＝ベンディットが一段と秀れた理論家であって、彼の状況分析は非常に明快だった。しかし、彼も問題の本質的な解決策は出し得ていない。

——解決策は非常に難しいと思いますが、それも明確な現状把握ができていないからではありませんか。

バタイユ そうです。その点では、思想家も、文学者も、演劇人も、現在の世界を明確に表現することができないと思う。一部の映画人にはそれができる期待がかけられるかも知れないが……

——『騒乱の5月』という本が出版されましたね。5月9日に、パリ大学理学部の助手が、自分のクラスの学生113人に、学生の動きについての感想を書かせたものです。この感想文の中には、実に多く、“不快”という言葉が出てきます。現在の大学機構、社会機構の矛盾をこの言葉で表現しているのですね。また或る学生は、その感想文の中で、“人はよくわれわれに精神的指導者がいないというが、われわれはそれを必要としない。われわれ自身が発言するのだ。”と書いています。つまり、現代社会そのものが、一時代前までのように、精神的指導者を拒否するような状況になっているのではないかと思うのです。精神的指導者を持つこと自体がひとつの服従、隸属を意味すると、少なくとも学生は考えは始めているのではないかと思います。

バタイユ 事実、サルトル以後、学生たちが精神的指導者と看做し得るような思想家は出ていませんね。また今言われたことと関連すると思いますが、5月事件の際に非常にはっきりしたことは、共産党とカトリック教会という、二つの大きな勢力が事態の進展について行けなかったという事実です。つまり、現代社会において、少なくともフランスでは、共産党とカトリック教会がまったく無意味になったということが明らかにになったと思います。

——5月の事件の中で、学生たちの間に特に反宗教的な、対教会的な動きが見られましたか？ 落書きの中には、“教会が多すぎる”だとか、“クロードルは大司教たちのためのミュージックホールだ”といった文句もありました。

バタイユ 私は、特に反宗教的な動きはなかったと思います。教会はまったく度外視されていたからだと思います。

——いわゆる、左翼カトリック知識人の動きについてはお気づきになりましたか？

バタイユ 私はその点については全然知りません。カトリック学生も知識人も、それぞれ個人として諸団体に加わって行動していたのだらうと思います。特に独自の行動があったかどうかは知りません。

ところで、日本でも、大学紛争が起っていますが、学生たちの落書きはありますか？

——今までのところあまりないようです。少なくとも、街の中の壁に落書きをするということは見られません。学生たちは、もっぱら大学の構内に毎日立看板を出して、そこに自分たちの主張を書いています。それは、パリの学生たちのこの落書きのような感覚的表現ではなく、より理論的な主張が多いようです。ただ、日本大学のように学生が建物を占拠しているところでは、内部に相当落書きがあるようです。日本大学の学生たちは、彼らの闘争の記録を本にして出版しました。『叛逆のパリケード』という題ですが、この中に次のような詩がのっています。

“生きてる 生きてる 生きている
パリケードという腹の中で
生きている
毎日 自主講座という栄養を取り
友と語るという清涼飲料剤を飲み
毎日 精力的に生きている

生きてる 生きてる 生きている

つい昨日まで 悪に支配され
栄養を奪われていたが
今日飲んだ解放というアンプルで
今はもう完全に生き変わった
そして今パリケードの腹の中で
生きている

生きてる 生きてる 生きている
今や青春の中に生きている”

そして、或る学生は、デモの際逮捕され数日間留置された後に釈放されてくると、友人たちに、留置場の中では、毎日寝ていたのだ、昔の生活に帰ったようだった、と言ったそうです。フランスと日本では、状況は相当ちがいますが、日本の学生も、現在の闘争によって、いわゆる巨大化された大学の中の疎外感、孤立感が、一時的にはあれ解消されて、青春の感覚、生の感覚を取り戻したという面はあると思います。ただ、立看板や落書きに、フランスの学生たちのような、ユーモア、皮肉の感覚があまり見られないのではないかと思います。

バタイユ 皮肉や諷刺というのは、フランス人に特徴的な精神ですからね。御承知の通り、フランスには“頭につながれたアヒル”という、週刊の諷刺新聞があって、社会・政治に関する諷刺で全面を埋めています。中でも、連載の“ド・ゴール宮廷目録”とでも呼ぶべきものは傑作ですね。17世紀のサン・シモンの文体でド・ゴールの行動を諷刺的に記録しているのです。『壁は語る』の中にも、随分面白いものがあ

りますね。たとえば、“私はグルシヨ派マルクシストだ”というのは、戦前のアメリカ喜劇映画で活躍したマルクス兄弟の一人がグルシヨということから考えられているのですね。このマルクス兄弟の映画をフランス人はとても好きで、今でも時々バリエで上映されて人気を集めています。それから、“モーター・バイクでポリ公を憐れいてしまえ”(Mettez un flic sous votre moteur.) というのは、ガソリン会社のエッソ、“あなたの車のエンジンに虎をお入れ下さい”(Mettez un tigre dans votre moteur.) という文句と、ガソリンが虎のようなエネルギーを出すという絵や映画で広告しているのから考えたものですね。それから、“君を愛す! 同志よ、舗石でもってそれをお伝え下さい!!!” というのは、父の日や母の日に、フランスの花屋などがきまって出す広告文句“父の日。花でもって感謝の心を伝えましょう。” いうのを使ったものです。それから、ユーモアの感覚とは別のことになりますが、いわゆる文学的な教養を背景にしたものが非常に多いことも、フランスの学生たちの特徴をよく表わしています。たとえば、“もはや $2+2=4$ でないことを僕ははっきり分かった” というのは、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』の中の、“ $2+2=4$ は結構だ。しかし、 $2+2=5$ のほうがより良い。” という一句から取ったのだと思います。それから、ブルトンをはじめとする多数の文学者からの引用が見られますね。

——つまり、この落書き全体は、反伝統的、反文化的な傾向の強い印象をわれわれに与えますけれども、よく読んでみると、やはりフランス個々の伝統や文化が多くくの句の背後にあるというわけですね。

バタイユ そうです。そこが、いわゆる“ヒッピー”と“怒れる若者たち”とちがうところではないかと思えます。フランスにはあまりヒッピーはいませんし、またその多くは外国人です。彼らは、5月の事件の際には、まさしく大喜びしたものです。しかし、この落書きに見られるような言語表現の能力は持たなかった。これは単なる落書きではないことは、何度も読み返すにつれていろいろなことをわれわれに考えさ

せることから分かります。したがって、この落書きは単に時局的な性格だけではなく、より普遍的な意味を持っていると思う。

——バタイユさんの御専門の演劇界では、5月事件以後、若い演劇人たちによる新しい動きが見られますか。5月には、若い演劇人たちが、方々の劇場を占拠して演劇運動革新を主張したと聞きましたが……

バタイユ 今のところ具体的な形での改革はないようです。フランスの演劇界は、内容的にいても、興行収益という点から見ても非常に不振な時期で、改革といっても具体的には非常に困難だと思います。演劇界にとって大きな問題は、オデオン座の閉鎖とジャン・ルイ・バロー座の追放問題ですが、彼の後継者を求めるのはほとんど不可能だと思います。ジャン・ルイ・バローが責任を取らされたこと自体に問題がありますから、自尊心を持った演劇人ならば、連帯という感情からいっても彼の後を継ぐことは好まない。勿論、ジャン・ルイ・バローの演劇活動がすべて肯定されるべきだとは思わない。たとえば私は、彼は実際にはブルジョワのための前衛劇を上演したに過ぎないと思う。クロードルを20年も遅く取り上げる。ヨネスコを15年も遅く取り上げる、という態度がそれです。ブルジョワたちは、常に遅れるものだから、バローは、この遅れてきたブルジョワたちに、いわば第二の前衛劇を提供してきたわけです。まあ、しかし、これは別の問題です。オデオン座が占拠された時に、バローは、学生や市民たちの前で、今夜からオデオン座はなくなった、バローは死んだ、といったのですが、これはあの時の状況から考えて当然の発言だと思います。政府は、占拠されたオデオン座の電源を切れと命令してバローはこれに従わなかったのだが、これも、3千人が劇場の中に入っている状態で電源を切れれば、パニックが起こるのは明らかだったからです。マルロー文化相の態度はどうも理解しかねるところがありますね。

—学生の問題に話をもどしますと、5月以後、政府は大学改革案を提出してきましたね。いわゆるフォー
ル案ですが、これについてはどうお考えですか？

ミタイユ 私は7月末には日本に来てしまいましたので、その後の学生の動きについてはよく知りません。
しかし、学生たちの不満が根本的に解決されることはあり得ないだろうと思う。5月革命の際、学生は大学
の“学生コミュニケーション化”を主張していたが、これが実現することは現在の社会体制の中では不可能だ。
フォール文相は非常に秀れた政治家であり、問題はよく理解しているだろうが漸進的な改革案しか提出で
きないことは当然である。学生側は、彼らの抱えている問題の根本的な解決を計るためには今後ともねば
り強い努力をする必要があるだろうと思う。その意味では、5月の短い幸福の期間は去って、厳しい建設
の時期が来たといえると思う。要するに、5月の事件が持った意味は、学生のみにとどまらず、一般にフ
ランス人たちの意識が強く揺り動かされたことだ。伝統にのみ縛られていることはできない、現実の世界
の動きと共に動かねばならないとフランス人たちが意識しはじめたことが重要だと思う。5月革命の真の
結果は今後の問題であると思うのです。

質問者：広田昌義

ニコラ・パタイユ

演出家、パリ・ユシュエ座で一連のヨネスコの作品を演出。1967年5月、ユシュエ座とともに来日。その
後日本に滞在し演劇活動に従事。1968年1月、ロマン・ベングルテン作『夏』を演出（劇団欧座・アートシア
ター公演）、好評をえた。

訳者あとがき

“またしても、それはさくらんぼの実る頃のことであった。”

1968年5月、パリの大学や劇場や街中の壁に現われた多くの落書きを採集した、ジュリアン・ブザンソン
は、落書き集『壁は語る』の前書きをこう書きだしている。

さくらんぼの実る頃——5月は、パリにとって、常に記憶すべき激動の月である。1789年、フランス大革
命は、5月5日の三部会でもってその口火が切られた。1871年のパリ・コミューンは、5月28日にその悲劇
的結末を迎える。1936年、“人民戦線”の年にもまた、5月は、全国の労働者のストライキと工場占拠の
月であった。そしてわれわれの記憶にまだ生々しいアルジェリア戦争が、フランス国内の市民戦争に発展す
る危機を迎え、かつて“フランス人は子牛ども〔^{ブー}カ）である”と呟いて政界を隠退したド・ゴールが、花
花しく再登場したのが、1958年の5月末のことであった。

しかし1968年5月は学生が主役を演じた点で、これまでの激動の5月とはすこし色合いがちがっている。
それは、何ものかの要求ではなく、何ものかに対する異議申し立てとして特徴づけられる。“五月革命”と
は、ド・ゴールを筆頭とする古い世代に対しての、プチ・ブルたちがどっぷり首までひたり込んでしまっ
ている“甘く静かな”フランス社会に対しての、そしてまた、そのフランス社会が目指している高度管理社会
に対しての、要するに、あらゆる形態における人間疎外に対しての、最もラディカルな異議申し立てであ
った。パリ大学ナンテール分校の一般教授は、この学生たちの欲求の最も的確な表現として、次の三つの落書き
をあげている。“禁止することを禁止する”，“われわれの欲求をこそ現実とみなそう”，“自発性 創造性
生”。

これらの落書きは、状況の産物であるがゆえに、われわれ日本の読者には理解することがかならずしも容易ではない。たとえば、“至急、救急車用ガソリン”という一句は、セネストでガソリンがまったくなくなってしまったパリの街と、激しい暴力で学生たちに襲いかかる国家保安隊のイメージをダブらせることによってはじめて意味を持つ。“幸福とは政治学院においては新しい観念である”は、政治学院の学生たちが、パリの学生の中で最もブルジョワ的であり、最もスノップであるという定評があるという知識が、理解の前提となるであろう。そして、コーン・ペンディットの似顔のポスターの下に書かれた、“われわれはみんなユダヤ系ドイツ人である”という一句は、フランス共産党機関紙『ユマニテ』が、この秀れた学生指導者を、フランスの一般民衆がユダヤ人とドイツ人に対して持つ特異な感情を計算に入れて、“ユダヤ系ドイツ人”と悪意をこめて呼んだことを知らなければほとんど意味を持たないであろう。しかし、このような註釈をひとつひとつの句につけるのはわずらわしい。われわれが、ここに収められたさまざまな写真と短文に、いわば想像的に参加する努力を惜しまなければ、“フナーキーな、すこし気狂いじみた自由、しかし、それは素晴らしい香りある味を持っていた”とある学生が表現する、あの5月のパリの空気を感じ取ることができるであろう。

*

この写真と短文がわれわれに提示するのは、“五月革命”の際のフランスの学生たちの感性的側面であるといえよう。しかし、彼らは5月の運動を通じて、学生運動論に関し、国家独占資本主義体制内の大学に関し、高度産業社会の根本的・人間的改革に関し、多くの重要な問題を論理的に提出したことを忘れてはならない。本書がきっかけとなって、フランスの学生たちがわれわれに投げかけた、理論的諸問題に取り組む若い読者が増えることを願っている。“五月革命”に関してフランスでは百点近くの書物が出版されたという。幸い日本にも数点の翻訳が出ている。『学生革命』(海老坂武訳・人文書院)、『五月革命』(石川一厚訳・合同出版)

等は、フランスの学生たちが提起している理論的諸問題を理解するための手頃な資料を与えてくれるであろう。

- (1) “Les murs ont la parole.” citations recueillies par Julien Besançon, Tchou éditeur. 原題を正しく訳せば『壁は発言する』であるが、これは同時に“壁に耳あり Les murs ont des oreilles.”のもじりである。本書に収められた短文はすべてここから選択されたものであり、写真は竹内書店編集部の努力によって集められた。本書の題と副題ならびに構成に関しては竹内書店編集部の意向に従った。
- (2) Épistémon : Ces idées qui ont ébranlé la France. Fayard. p.103.
- (3) Les journées de mai 68. Rencontres et dialogues. D. de Brouwer. p.18.

1969年1月

広田昌義

Julien Besancon: LES MURS ONT LA PAROLE, Copyright © 1968 by Tchou, Editeur.

AFFICHES MAI 68, Copyright © 1968 by Tchou, Editeur.

This book is published in Japan by arrangement with Tchou, Editeur, Paris, through Bureau des Copyrights Français.

訳者 広田昌義 (ひろた まさよし)

1963年北大仏文卒業。1964年9月～1967年10月パリ大学留学。

現在、東大教養学部助手。

●壁は語る 学生はこう考える ●1969年2月20日第1刷発行 ●定価500円

●J・ブザンソン＝編 ●広田昌義＝訳 ●栗津 潔＝構成

●オリオン・プレス＝写真提供

●発行者＝竹内 博 ●発行所＝株式会社竹内書店 東京都港区北青山2丁目12-35

電話(404)8571～5

印刷＝白鷺舎印刷工業 製本＝長谷川製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします